

# レオ・シュトラウスと現代科学の危機

松尾 哲也

## はじめに

近代以降、科学は自然の様々な現象や原理の解明に多大な成果をあげ、発展を遂げてきた。そして科学は技術と結び付くことによって人間の力を増大させ、科学技術の発展は、人間の生活をより便利に、また物質的により豊かにしてきた。しかしその反面、科学技術は、戦争に利用されることによって人間生活を脅かし続けてきたのも事実である。

第一次世界大戦では、当時の最新の科学技術が戦争に利用され、戦車、そして毒ガスが実戦で使用された。第一次世界大戦は史上初めての総力戦となり、戦場で戦う兵士だけでなく、女性も含めた本国の労働者が総力をあげて兵器の生産などを行い、国家の技術力、生産力が戦争遂行のために総動員された。

第二次世界大戦では第一次世界大戦以上の甚大な損害を人間社会は被った。なかでも第二次大戦末期に登場した原子爆弾の破壊力は絶大であり、広島・長崎に投下された原子爆弾は、数十万もの人命を奪い、そこに住む人々の生活基盤をことごとく破壊した。

「近代人は盲目の巨人である」と指摘したのは20世紀の政治哲学者レオ・シュトラウス (Leo Strauss, 1899-1973) である。シュトラウスによれば、近代人はそれ以前の人間と比べると巨人であるが、その力の増大に比べて知恵や善性は増していない。科学は確かに人間の力を増大させたが、その力の正しい使用について責任ある仕方で何も教えることはできないとシュトラウスは指摘する<sup>1</sup>。シュトラウスにとって、その背景にあるのは、実証主義に基づく次のような見解、すなわち諸価値に関する科学的な、それゆえ合理的な知識は存在せず、科学ないし理性は善い目的と悪しき目的とを区別することはできないとする見解<sup>2</sup>、そして一般に科学者には価値判断は許されないという見解である<sup>3</sup>。

こうした実証主義の問題についてシュトラウスは、そのマックス・ウェーバー批判のなかで詳細な議論を展開している。そしてこれまでの研究においてシュトラウスのウェーバー批判が取り上げられるとき、それは実証主義的な社会科学の範疇で扱われることが多かった。しかし、シュトラウスにとって実証主義の問題は、さらに広い問題を含んでいる。シュトラウスにとって実証主義の問題は、科学という人間の営為そのものに関する問題であり、また人間理性に関わる根源的な問題を内包するものである。

本稿では実証主義の問題をまず社会科学の範疇においてシュトラウスがどのように捉えていたのかを明らかにするが、本稿はそうした社会科学の範疇をさらに超えて、科学の存在意義、

そして科学技術が生み出す諸問題を射程に入れてシュトラウスの実証主義批判を考察する。そうした考察を通じて、本稿は、シュトラウスが現代科学の問題をどのようにとらえ、またシュトラウスの現代科学に対する分析が現代の科学技術が引き起こす諸問題に対して、どのような有意性をもっているのかを明らかにすることを目的としている。

## 第1章 現代科学の危機

### 第1節 神々の闘争と学問の限界

シュトラウスが実証主義の問題をどのように捉えていたのかを把握するためには、まずシュトラウスのマックス・ウェーバー批判について検討していかなければならない。

ウェーバーは、『職業としての学問』のなかでいわゆる「神々の闘争」に言及している。神々の闘争とは、20世紀の価値の分裂・対立状況を指しており、ウェーバーによると、20世紀の世界に存在するさまざまな価値は、互いに解き難き争いのなかにある<sup>4</sup>。その価値の分裂・対立状況は、真・善・美といった根本的な価値や文化的価値、そして個人人の生活の拠り所となる究極的態度にまで及んでいる<sup>5</sup>。そして学問<sup>6</sup>は、その神々の闘争と呼ばれる価値の分裂・対立を解決することはできない。

ウェーバーは、そうした学問の限界について次のように断言している。つまり対立している諸目的の間の衝突がどのようにして調整されうるのかという問題に対して、何らかの決定を与えるような、(合理的なあるいは経験的な)学問的な方法(wissenschaftliches Verfahren)は存在しないということである<sup>7</sup>。

ただウェーバーにとって価値の対立は、学問によって解決されるものではないとしても、それは、学問が価値の問題に全く関与しないことを意味していない。学問とりわけ、社会科学の研究の対象は、研究者自身の価値理念への関わりから選択され、社会科学的認識の対象は、社会科学者の価値理念を通じて混沌とした無数の事実の大海から浮かび上がってくる。それが「価値関係(die Wertbeziehung)」と呼ばれるものである<sup>8</sup>。ウェーバーの社会科学の認識理論の特徴を示す価値自由の意味は、研究者は常に自分の研究の前提にある価値理念を意識しつつ、その価値理念からできるだけ自由でなければならないということにあった<sup>9</sup>。

ウェーバーにとって事実の学問的な論究と価値評価をとまなう理性的判断とを混同することは、専門的研究にとって有害であった<sup>10</sup>。社会科学的認識の対象が研究者の価値理念によって選択されるとしても、研究者はその価値理念から可能な限り自由になり、あくまで事実を事実として分析しなければならない。そのためには価値の判断基準や選択基準を提示したり、また価値判断を下したりすることはできるだけ禁止しなければならないのである<sup>11</sup>。

厳密かつ客観的な事実認識のために、価値の判断基準や示したり、価値判断を下したりすることを控えるという態度は、社会科学の認識の客観性を保持するために、ウェーバーのみならず、実証主義的な自然科学をモデルとする科学的政治学においても支持される態度であった。

政治学の分野でも、善き政治秩序とは何かといった規範的問いを排除して、政治的現象をもっぱら経験的な事実即ち観察・分析しようとする試みが、アメリカにおいて1950年代から顕著にあらわれてきたのである<sup>12</sup>。

しかし、そうした社会科学における実証主義に対してシュトラウスは批判を浴びせる。それは、社会科学が厳密で客観的な事実認識に徹するあまり、事実に対する批判的態度を喪失してしまうことへの批判である。

シュトラウスによると、社会科学において価値判断を禁止すれば、強制収容所にみられる行為を厳密に事実即ち記述したり、また強制収容所に関わる行為者の動機を事実即ち分析したりすることは許されても、そうした強制収容所の残虐性について語ることは許されないという<sup>13</sup>。つまり、強制収容所で大量虐殺が行われても、社会科学は大量虐殺を行った行為者の動機を事実即ち分析することはできるが、その大量虐殺そのものが残虐であるという価値判断を下すことはできない。シュトラウスからすれば価値判断は合理的な規制に服さないという信念は、正義・不正、善・悪に対して無責任な主張をもたらす傾向に拍車をかける<sup>14</sup>。

価値判断を捨象し、事実の客観的な認識に努める実証主義的な社会科学は、社会科学が自然科学と同様の学問的客観性を追い求めることによって成立した。しかし、実証主義的な社会科学は、価値判断を控えることによって、倫理的に中立的な科学となり、現実への批判的視点を喪失してしまうという問題を抱えている。

## 第2節 科学の存在意義の喪失

ギリシャ哲学の研究者である藤沢令夫（1925-2004）によると、自然科学は、当面の研究対象となる特定の事象の仕組みや構造の究明に直接関係のない事柄（たとえば、研究者自身の感情や情緒、価値観、人生の意味など）をいっさい切り捨てて関心の外に置き、ひたすらその対象の「客観的」なあり方だけに全注意を集中することによって、目覚ましい成果をあげてきた<sup>15</sup>。そうした価値の問題を科学的探究の埒外に置く自然科学が想定しているのは、二つの世界の乖離・分裂である。つまり、科学が「客観的事実」として設定している、「物」とその運動の世界、そして人間の具体的な生活や経験に根ざしている価値や倫理や道德の世界であり、その二つ世界が互いに乖離し、分裂している。端的に言えば、事実（存在）の世界と価値（善）の世界の乖離・分裂である<sup>16</sup>。

自然科学は、その二つの世界のうち、事実（存在）の世界を対象とし、事実に関わる「客観的知識」を探究する。そうした探究において、価値（善）に関わる「主体的な知恵」は捨象される。それゆえ、二つの世界の乖離・分裂はまた、人間の知が、事実に関わる「客観的知識」と価値（善）に関わる「主体的な知恵」の二つに分裂することを示している。そしてその二つの世界の乖離・分裂状況のなかで、「価値や道德や倫理の問題は厳密な知識とはなりえない」という価値・倫理の「非知識性」が主張されるようになった<sup>17</sup>。

ウェーバーが社会哲学<sup>18</sup> および社会科学の倫理的中立性を主張した真の理由は、当為に関す

るいかなる真正な知識も存在しないとウェーバーが信じていたからであるとシュトラウスは指摘する<sup>19</sup>。つまりウェーバーは、真の価値体系に関する、経験的のものであれ、合理的なものであれ、いかなる科学も人間はもたないことを主張し、また科学的なものであれ哲学的なものであれ、真の価値体系に関するいかなる知識ももたないことを主張したということである<sup>20</sup>。

シュトラウスによると、ウェーバーにとって、真の価値の体系は存在せず、存在するのは、多様な同等の諸価値であり、その諸価値の要求は相互に対立し、またその諸価値の対立は人間理性によって解決されえないものであった。そして社会科学ないし社会哲学は、その対立とその対立がもつ意味を明確にすることしかできない。価値の対立の解決は、個々人の自由で非理性的な決断にゆだねられている<sup>21</sup>。

こうした価値に関する科学的・合理的な知識の否定は、社会科学においては、あらゆる社会的事象を無批判的に記述するだけの価値中立的で道具的な科学を生み出す<sup>22</sup>。シュトラウスの実証主義批判が取り上げられるとき、そこでは実証主義的な社会科学の倫理的中立性が主たる問題となっていた<sup>23</sup>。

ただシュトラウスは、実証主義について、ただ社会科学の倫理的中立性だけに限定してその問題を提起しているわけではない。実証主義の問題は、社会科学の問題に限定されず、科学そのものの根本的な問題を含んでいる。それは科学の存在意義とは何かという問題である。

シュトラウスによると、功利主義的な傾向が残存していたときは、科学者と社会科学者は、健康や長寿、繁栄は善きことであり、科学はそれらを確保し、手に入れるための手段を発見しなければならないということを当然のことと見なしていた<sup>24</sup>。つまりその時は、まだ科学の目的や存在意義も明確であった。

しかしそうした科学の目的、つまり功利主義的な目的ですら、それがかつて有していた明証性をいまや主張することができないとシュトラウスは指摘する<sup>25</sup>。なぜならシュトラウスによれば、ここ70年の間<sup>26</sup>に、「価値」に関する科学的な、それゆえ合理的な知識の可能性など存在しない、つまり科学ないし理性には、善い目的と悪しき目的とを区別する力はないという意見がますます受け入れられるようになったからである<sup>27</sup>。

シュトラウスからすれば、諸価値に関する合理的な知識の否定は、やがて科学そのものの存在意義を崩壊させる。つまり諸価値に関する合理的な知識が存在しないこと、また科学者には価値判断は許されないとする主張が台頭することによって、そもそも科学そのものは善であるのか否か、また科学が善であるとすれば、それはどのような意味において善であるのか、そうした科学の存在意義に向けられた根源的な問いに対して科学そのものが答えることができないという事態が生まれる<sup>28</sup>。人間が生存するために、また善く生きるために、科学は必要であるという合理的価値判断を科学自身が明確に示すことができなくなったのである<sup>29</sup>。

そうした状況は、水爆兵器の時代が到来したことによってさらに深刻となった。シュトラウスは、水爆兵器の時代において、人類の生存と科学との積極的な関係は、元来それが有していた明らかな明証性をすべて喪失したと指摘する。科学は、人類の生存さえ脅かしかねない核兵器を生み出し、それによって科学そのものが善であるという明証性そのものが失われてしまっ

た<sup>30</sup>。

価値に関する合理的な知識を否定する実証主義の問題は、科学そのものの存在意義について、科学自体が説明することができないというより深刻な問題を含んでいる。さらに核兵器の存在は、それを生み出した科学が人類の生存すら脅かすものであることを証明した。ただそうした事実から、科学の功罪のうち、罪だけを取り上げ、科学がもたらしたさまざまな恩恵を否定することはできないし、また科学そのものを放棄することはできない。

では、「なぜ科学なのか」、また「科学の存在意義とは何か」という問いに対してどのように答えるべきだろうか。また科学がその存在意義を確認していくために求められていることは何か。

そうした問題に取り組むために、次章では、近代科学が成立する以前の世界、すなわち古代ギリシャの時代にまで遡り、シュトラウスの古代ギリシャ哲学に対する解釈から、古代ギリシャ哲学において世界がどのような学問的方法によって認識され、また哲学が人々が生活する共同体のなかでどのように認知され、またいかなる存在意義をもっていたのかを明らかにしていく。なぜならシュトラウスは、古代ギリシャ哲学の解釈を通じて、知的探究の在り方について、また知的探究の基盤と存在意義について重要な議論を展開しているからである。

## 第2章 古代ギリシャ哲学と現代科学

### 第1節 意見を出発点とする哲学

シュトラウスの古代ギリシャ哲学に対する解釈について考察する際、まず注目すべきは、古代ギリシャの哲学者のなかでも、政治哲学の創始者であるソクラテスの哲学的探究である。

ソクラテスにとって哲学とは意見から知識へと上昇することであり、ソクラテスはこの上昇を対話術と呼んだ<sup>31</sup>。ソクラテスが意見から出発したのは、意見が「純粋な真理の汚れた断片」<sup>32</sup>だったからである。事物の本性に関する多様な意見を無視することは、我々が有する事実へと接近する最も重要な方法、あるいは我々が到達できる範囲にある真理の最も重要な痕跡を放棄することである<sup>33</sup>。事物の本性についてより矛盾のない、つまりより真理に近い知識に到達するには、より多様な意見から出発しなければならない<sup>34</sup>。

またソクラテスにとって多様な意見の存在は、真理の探究を促す動因であったことをシュトラウスは強調している。事物の本性に関する意見にそれぞれ矛盾がみられるという事実、その事実こそがより矛盾のない見解に到達しようとする哲学的営為を生み出したのである。

シュトラウスによると、ソクラテスは、ある事物が「何であるか」という問いを提起する際、我々にとってまず在るもの、最初に目に見えてくるもの、つまり現象から出発した。ただ最初に目に見えてくるものは、我々がそれらの事物を見ていることのうちに存するのではなく、それらの事物について言われていること、すなわちそれらの事物に関する意見のうちに存する。それゆえソクラテスは、事物の本性を理解する際、事物の本性に関するさまざまな意見から出

発した。こうしたソクラテスの変革をシュトラウスは、「常識」、もしくは「常識の世界」への転回として表現されるものであると指摘している<sup>35</sup>。

そしてシュトラウスによると、「何であるか」という哲学的探究を人間の生や善・悪の事柄に関する探究へと向かわせた最初の人物がソクラテスであった<sup>36</sup>。ソクラテスの人間的な事柄に関する研究は、人間的な事柄に関して「何であるか」という問いを提起すること、たとえば、「勇氣とは何か」、「都市とは何か」といった問いを提起することであった。ただソクラテスの研究は、勇氣といった何か特定の人間の事柄に関して問いを提起することに限定されず、人間的な事柄とは何かといった根本的な問いをも提起するものでもあった<sup>37</sup>。

人間的な事柄に特有の性質を把握するためには、人間的な事柄と人間的ではない事柄、すなわち神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的な事柄との間にある本質的な違いを把握しなければならず、人間的な事柄に関する研究は、神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的な事柄に関する理解を前提とする。それゆえソクラテスの人間的な事柄に関する研究は、「あらゆる事柄」に関する包括的な研究に基づいていた<sup>38</sup>。つまり、ソクラテスの人間的な事柄に関する研究は、神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的な事柄を無視したものではなく、自然的事象に対する研究や神学的な研究も含めた包括的な研究に包摂されていたのである。

先述したように、現代科学は、事実の世界と価値の世界とを分断することによって成立していた。つまり、「世界・自然のあり方の探究から人間の生き方・行為の在り方に関する事柄を切り離す」ことによって成立していたのである<sup>39</sup>。

それに対して古代ギリシャにおいてはもともと世界・自然のあり方に関する知の探究である自然学と、人間の生き方・行為の在り方に関する知の探究である哲学・倫理学は、全体の理解に向けた人間の知的営為のなかに包摂されていた。アリストテレスによれば、あらゆる技術、あらゆる研究も何らかの善を目指すものであり、政治の究極的な目的である「人間にとっての善」こそが、諸々の学問の目的を包摂していたのである<sup>40</sup>。つまり、研究や技術は、善という倫理的価値を求めるものであり、また研究と技術は、「人間にとっての善」を目的とする政治によって一定の規制が課されるべきものであった。シュトラウスによると、アリストテレスは、倫理的・政治的規制からの技術の解放は、悲惨な結果へと至ることを絶対的に確信していたのである<sup>41</sup>。

ところが、17世紀以降、数世代を経るうちにニュートン物理学のような新しい科学が成功にするに従って、哲学と科学との間に大きな区別が生じたとシュトラウスは指摘する。つまり、「科学」とは近代の哲学ないし科学の成功した部分であり、「哲学」とは成功しなかった部分となった。こうして、科学は、哲学よりも高い地位をもつようになり、その結果として、科学的ではないすべての知識は軽視されるようになる。そしてシュトラウスによると科学こそが、世界に関する人間の自然的理解の完成態とみなされるようになった<sup>42</sup>。

その成功した科学がやがて技術と結合し、工業化・産業化した社会が進展する。現代の自然科学は、古代ギリシャの自然学、すなわち世界・自然のあり方に関する知の探究に起源をもつが、その自然学に起源をもつ世界の見方のみが、近代以降、独立に追求され、発展し、そして

その成果が技術的に応用されることによって、我々が住む環境を大きく変革させてきた<sup>43</sup>。

人間を取り巻く環境は、科学技術の進歩によってより便利に、またより快適になったが、工業化・産業化の進展によって生じる公害や環境破壊によって、悪化しているのも事実である。また科学と技術の結合は、もともと自然界に存在しない様々な新しい物をつくり出してきた<sup>44</sup>。次々と新しい薬品が開発され、また医療技術が進歩することにより人間は様々な病気に対抗できる力を獲得し、健康を維持できるようになった。しかし、その一方で薬害や遺伝子操作技術による生命倫理の問題など、新たな問題を生み出しつつある。また科学と技術の結合は、原爆・水爆といった人類の存在さえ脅かしかねない核兵器を出現させた。

そうした負の側面を考えると、科学の存在意義を人間や社会の在り方を含めた全体的視野から改めて問う新たな知の方向性が求められているといえよう。

藤沢令夫は、人間が環境として世界のなかに生きて行動するという原初的な事実からすると、世界のあり方や事物のあり方を知ることと、そのなかで我々自身がいかに行動し、いかに生きるかを知ることとは、別個に分かれているわけではなく、それぞれがお互いを要求しつつ一体的で切り離すことができないものであり、そしてそれが「知る」ということの自然本来のあり方ではないかと論じている<sup>45</sup>。

また藤沢は、科学の対象を極限化する研究方法についても問題を指摘している。科学は、それぞれの専門分野において、研究しようとする対象をその他の部分から切り離して考察するが、いかなる対象でも決してそれ自身だけで孤立して存在しているわけではなく、世界全体のなかの他の様々な部分との内的な関係に支えられて存在している<sup>46</sup>。それを全く度外視して、ある特定の対象だけを切り取り、他のものを一切排除した考察や研究の結果は、その対象の本質そのものを変貌させ、また全体との関係を見失わせると藤沢は指摘している<sup>47</sup>。

科学が生み出した様々な成果について、それは自然の在り方、そして人間の在り方や社会の在り方を含めた世界全体の環境維持にとって本当に善いことであるのか、そうした問いは、局所的な科学的知識によっては解決できない問題であり、世界・自然のあり方に関する知の探究と、人間の生き方・行為の在り方に関する知のみならず、社会や政治の在り方を含めた知の探究との融合によって、問われるべき問題である。そうした知の在り方や方向性について考えるとき、全体の理解に向けた知の探究であった古代ギリシャ哲学は重要な示唆を与えるものである。

## 第2節 哲学の責任

本節では、さらにシュトラウスの古代ギリシャ哲学の解釈から、古代ギリシャの政治的共同体において知恵の探究である哲学がどのように認知され、またいかなる存在意義をもっていたのかを明らかにする。

先述したように、ソクラテスにとって意見は真理の断片であり、多様な意見の存在こそが、哲学的探究の出発点であった。そしてシュトラウスによるとその意見の領域とは、政治的領域

であった。それゆえ意見を出発点とする哲学は、自らの行為を反省し始めるやいなや、その意見の領域たる政治の領域が哲学的関心の的にならざるをえない。

さらに哲学がそれ自身の目的と本性を十分理解するためには、その本質的な出発点である政治的領域を理解しなければならず、また政治的なものの本性を理解しなければならない<sup>48</sup>。そして哲学がその出発点である意見の領域、すなわち政治的領域を出発点とし、やがて政治的なものを哲学的考察の対象として設定することが、「なぜ哲学なのか」そして「なぜ人間の生活に哲学が必要なのか」という問いに答える責任を哲学者に課すことになる。

シュトラウスによると、「なぜ人間の生活に哲学が必要なのか」という問いに関して、人間の生活は共に生きることであり、より正確に言えば政治的な生活であるから、「なぜ哲学なのか」という問いは、「なぜ政治的な生活に哲学が必要なのか」ということを意味する。そして哲学者は政治的共同体の法廷の前でその問いに答えなければならない<sup>49</sup>。なぜなら哲学の意味は決して一般的に理解されておらず、また哲学は多くの善意の市民たちによって信頼されることなく、嫌われていたからである<sup>50</sup>。そうしたなかで、「なぜ政治的な生活に哲学が必要なのか」という問いは、哲学を政治的に責任あるものとし、哲学者が政治的生活を無視してしまうことを禁じる<sup>51</sup>。

哲学者は自らが生き残るためには、必然的に哲学を政治的共同体の法廷の前で正当化しなければならない。哲学の存在を政治的共同体に対して正当化するには、哲学が政治的共同体の安寧に貢献することをアピールする必要がある。シュトラウスによると、プラトンの『国家』は、他の古典古代の哲学者の著作と同様に、政治的共同体の安寧が決定的に哲学の研究に依存していることを示すことによって、哲学を政治的に正当化しようとする試みとしての性格をもっていた<sup>52</sup>。

ただ哲学者は、哲学を政治的に正当化するためだけに、政治的共同体ないし政治的領域の安寧に貢献しようとしていたわけではない。すでに指摘したように、意見は真理の断片としての性質をもっていた。そして意見の領域とは政治的領域であった。それゆえ政治的領域は、哲学的探究にとって欠くことのできない学問的基盤であり、意見の領域たる政治的領域こそが哲学的探究の学問的出発点だったのである。

哲学は意見の領域を基盤としている以上、意見の領域が崩壊すれば、哲学的探究も成立しない。哲学は、政治哲学として必然的に意見の領域たる政治的領域を善き方向に導く責任を負っているのであり、シュトラウスによるとまさに古典的政治哲学の主要な関心とその存在意義は、政治的生活を記述したり、理解したりすることではなく、政治的生活を正しく導くことにあった。そしてそれゆえにこそ古典的政治哲学は価値判断によって導かれていたのである<sup>53</sup>。

このように意見から出発する哲学者にとって、人々が共に生活する領域つまり政治的領域こそが哲学の基盤であり、それゆえにこそ哲学は、政治哲学として価値判断に導かれ、意見の領域たる政治的領域を善き方向に導く責任を負っていたのである。



### 第3章 根源としての生活世界

#### 第1節 フッサールの生活世界論

先述したように17世紀以降、ニュートン物理学のような新しい科学が成功にすることによって、哲学と科学とが分離した。「科学」とは近代の哲学ないし科学の成功した部分であり、科学が哲学よりも高い地位をもつことによって、科学的ではないあらゆる知識は軽視されるようになった。そして科学こそが世界に関する人間の自然的理解の完成態とみなされるようになったのである。

しかし、その後、19世紀に非ユークリッド幾何学の発見と物理学におけるその応用などが起こることにより、科学は、世界に関する人間の自然的理解の完成態とみなすことはできず、むしろ世界に関する人間の自然的理解の根本的な修正であるということが明らかになった<sup>54</sup>。つまり、それまでの世界の科学的理解というものは、自然的理解の完成態ではなく、その根本的修正を経て生まれるものであることが明らかになったのである<sup>55</sup>。そのことについてシュトラウスは、エドムント・フッサール（Edmund Husserl 1859-1938）に言及して以下のように述べている。

「フッサールは誰よりも深く次のことを理解していた。つまり世界の科学的理解は、我々の自然的理解の完成態では決してなく、我々をして科学的理解の基盤そのものを忘却させるようなやり方で、世界の自然的理解から派生してきたものである。したがってあらゆる哲学的な理解は、世界に関する我々の常識的な理解から、すなわちあらゆる理論化に先行して感覚的に把握される我々の世界理解から出発しなければならない」<sup>56</sup>。

フッサールによれば、学問（科学）（Wissenschaft）とは人間の精神の作業であり、その作業は歴史的にも、また学ぶ者それぞれにとっても、存在するものとして前もって共通に与えられている直観的な生活環境から出発することを前提としている<sup>57</sup>。その生活環境とは、生活世界と呼ばれるものである。生活世界とは、現実に知覚によって与えられ、経験することができる日常的な世界である<sup>58</sup>。学問（科学）がある問いを提起したり、またその問いに答えたりするとき、その問いは初めからそして必然的にその後も、この前もって与えられている世界、つまり問いが提起され、またあらゆる普段の生の実践が行われているこの生活世界を基盤としており、生活世界の存立に依拠している<sup>59</sup>。どのような学者（科学者）であろうと、探究されるべき問いを提起するのは、私たちが実際に生きているこの生活世界であり、また実験の計測器を見たり、データを収集したりするのも、この生活世界である。

フッサールによると、実際に最初のもは、前科学的な（vorwissenschaftlichen）世界生活の「単に主観的—相対的な」直観である<sup>60</sup>。しかしながら、近代の客観性の理想に従う研究者にとって、そうした「単に主観的—相対的な」ものはすべて、客観性に乏しいものとして侮蔑的に扱われている。この生活世界で生起するすべてのものは、科学的な目的やその他の目的のために必要に応じて利用されるが、「客観的真理」をテーマとする自然科学者にとってこの生活世

界は、「単に主観的—相対的な」特徴をもっており、「主観的—相対的なもの」は克服されるべきものである<sup>61</sup>。

しかし、フッサールによると、自然科学者は、そのように客観的なものに関心を持ち、客観的に活動する一方で、その主観的—相対的なものは、とるに足らない通過点ではなく、あらゆる客観的検証のために理論的—論理的な存在的妥当性を究極的に基礎づけるものとして機能する。つまり、明証性の源泉、検証の源泉として機能するのである。

近代科学が把握しようとする世界、つまり「客観的で」「真の」ものとされる世界は、あくまで理論的—論理的構築物であり、原理的に知覚することも、またその固有の存在自体について経験することができない。たとえば、科学が最新の知識を用いて宇宙の全体像を説明するとしても、私たちは、その全体像を知覚することはできないし、また経験することもできない。それは理論的—論理的に構築されるだけである。

それに対して、生活世界的に主観的なものは、あらゆる点で現実に経験しようという特徴をもつ。それゆえフッサールは、生活世界こそが、根源的な明証性の領域であると主張する<sup>62</sup>。つまり経験こそが純粋に生活世界において起こる明証性であり、それ自体はけっして客観的なものの経験ではない学問の客観的立証の明証性の源泉になるということである<sup>63</sup>。

このようにフッサールによれば、数学的知識によって世界を理解してきた科学は、生活世界における前科学的な知見や直観を「主観的かつ相対的なもの」として客観性に乏しいものとして侮蔑してきたが、そうした生活世界の前科学的な知見ないし直観こそが、あらゆる客観的検証のために理論的—論理的な存在的妥当性を究極的に基礎づけるものとして機能する。そうした生活世界の前科学的なものを重視するフッサールの姿勢は、シュトラウスに受け継がれている。次節では、シュトラウスの政治哲学が重視する前科学的知識の概念を中心に、前科学的知識がもつ役割と意義について明らかにしたい。

## 第2節 前科学的知識

シュトラウスは、科学的知識が人間の知識の最高形態であるという信念には、前科学的知識（pre-scientific knowledge）を軽視する意味合いが含まれていると指摘する<sup>64</sup>。そのシュトラウスが用いる前科学的知識は、政治哲学において重視されている。シュトラウスにとって政治哲学とは、「政治的なものの本性とともに、正しい、あるいは善き政治秩序を真に知ろうとする試み」<sup>65</sup>であるが、まさに「政治的なものは何か」という問いは、科学的に取り扱われるのではなく、弁証法的に（dialectically）取り扱われる。そして弁証法的な取り扱いは、必然的に前科学的知識より始まり、それを最も重視する<sup>66</sup>。

シュトラウスによると、その前科学的知識、もしくは「常識的な」知識は、コペルニクスやそのあとに続く自然科学によって、信頼できないものと思われている<sup>67</sup>。

望遠鏡や顕微鏡による観察によって得られる知識がある特定の領域において非常に有益であるという事実をシュトラウスは認める。ただシュトラウスは、そうした事実によっても次のよ

うなことまでは否定できないと主張する。つまり、何の器具も用いない人間の目で見られる場合にのみ、つまりもっと正確に言えば、科学的な観察者の視点とは区別される市民の視点において見られる場合にのみ、あるがままの姿で認識できるものが存在するということである<sup>68</sup>。

シュトラウスは、政治的なものの本性を理解しようとする試みについては、まず政治的な知識を保持していなければならないと主張する。そして分別ある大人ならば、ある程度の政治的知識を保持しており、誰もが税、警察、法、刑務所、戦争、平和、休戦について何かを知っていると述べる。さらに誰もが、戦争の目的は勝利であること、戦争は最大の犠牲と他の多くの損失を要すること、また勇氣は賞賛に値し、臆病は非難に値することを知っていると指摘する。普通の人があつた政治的知識は、長く政治的経験を積んだ人があつた政治的知識と比べると確かに乏しいけれども、普通の人も常識としてある程度の政治的知識を保持している<sup>69</sup>。そして政治哲学はまさに、そうした普通の人々が常識として保持している政治的知識を真剣に取り上げる。

世界を客観的に理解しようとする自然科学は、その科学的理解の基盤が生活世界にあるにも関わらず、生活世界を主観的一相対的なものの領域として侮蔑してきた。しかし、フッサールによると、その主観的一相対的なものは、単なる通過点ではなく、あらゆる客観的検証のために理論的一論理的な存在的妥当性を究極的に基礎づけるものとして機能する。シュトラウスにとってその主観的一相対的なものとは、意見や常識といった前科学的知識である。

さらにフッサールによると、科学が忘却していたのは、あらゆる学問が問いを提起したり、またその問いに答えたりするときに、その問いは最初からこの生活世界、つまりそのなかで問いが提起され、また生の実践が行われているこの生活世界を基盤としており、あらゆる学問もその生活世界の存立に依拠しているということであった<sup>70</sup>。

古代ギリシャの哲学者の学問的基盤が意見の領域たる政治的領域にあつたように、シュトラウスにとって意見と常識によって取り巻かれている生活世界こそが政治哲学の基盤である。そしてそれゆえにこそ、政治哲学は生活世界を善き方向に導く責任を負っている。政治哲学が意見や常識といった前科学的知識を出発点としているという事実が、意見や常識によって取り巻かれた生活世界に対する政治哲学の責任を自覚させる。ではこうした前科学的知識を重視するシュトラウス、そしてフッサールの議論は、現代の科学にどのような示唆を与えるだろうか。

科学者以外の人間がもっている科学的知識は、科学者が保有している科学的知識よりも乏しい。しかし、科学者もそうでない者も現実に生きて活動しているのは、この生活世界であり、生活世界においては、常識という一定の共通理解が存在している。

科学によって発見された知識が技術と結びつき、実践的に応用されるとき、科学の側はその応用が生活世界にどのような影響を与えるのかを考慮する責任を負う。その責任を果たす上で、科学の側が視野に入れ、真剣に検討しなければならないのは、生活世界の常識的価値判断であろう。

シュトラウスの記述にあるように、誰もが、戦争の目的は勝利であること、戦争は最大の犠牲と他の多くの損失を要すること、また勇氣は賞賛に値し、臆病は非難に値することを知って

いる。そのなかで、戦争が最大の犠牲と他の多くの損失を要するという常識的価値判断は、戦争遂行の手段や技術と結びつく科学への反省を促すであろう。

フッサールによれば、生活世界は理論的であれ、理論以外であれ、すべての実践のための「基盤」であり、それは、常に実践的な関心をもっている主体としての我々に偶然与えられたものではなく、あらゆる現実的で可能な実践の普遍的領域として、また地平として、前もって与えられている<sup>71</sup>。そして生活世界では、すでに認識が前科学的な認識として常に役割を演じており、その認識の目標は、実践的生活を全体として可能にするために十分なほど達成されているとフッサールは主張する<sup>72</sup>。

さらにフッサールによると、科学者が客観的なものに関心をもち、客観的に活動しながらも、生活世界の主観的—相対的なものは、単なる通過点ではなく、あらゆる客観的検証のために理論—論理的な存在の妥当性を究極的に基礎づけるものとして機能していた。そして生活世界が、科学的認識の明証性の領域であると同時に、実践的生活を可能にする前科学的認識が存在する領域であるとするれば、科学は、実践に関する前科学的認識を主観的—相対的なものとして否定することはできない。シュトラウスが重視する前科学的知識は、そうした実践に関する価値判断を含んでおり、科学は人間と社会を含めた世界全体を視野に入れてその責任を果たすとき、その前科学的知識を重視せざるをえないのである。

## おわりに

シュトラウスにとって実証主義の問題は、単に社会科学の倫理的中立性といった問題に限定されるのではなく、科学がそれ自身の存在意義を証明することができないという根本的な問題を内包していた。

シュトラウスは、近代科学が生まれる以前の古代ギリシャ哲学の世界理解について考察し、ソクラテスの学問的探究は、人間的な事柄に関する研究に限定されず、自然的事象に対する研究や神学的な研究も含めた包括的な研究に依拠していたことを明らかにする。古代ギリシャでは、世界・自然のあり方に関する知の探究である自然学と人間の生き方・行為の在り方に関する知の探究である哲学・倫理学は、全体の理解に向けた人間の知的営為のなかに包摂されていた。

現代科学の危機は、科学がもつばら事実の世界の探究にのみ邁進することによって、価値の世界と断絶し、科学自体がその存在意義を喪失するという危機であった。シュトラウスの古代ギリシャ哲学への言及は、そうした現代科学が抱える問題を克服する知の方向性を我々に提示するものである。

またシュトラウスは、古代ギリシャの哲学が政治哲学として現れる過程について詳細に分析し、哲学が意見の領域たる政治的領域に基盤を有し、それゆえにこそ、政治的領域に対して責任を負っていたことを明らかにする。哲学が政治哲学として出現する過程についてのシュトラウスの考察は、単に政治を対象とする学問に限定されるのではなく、科学そのものの存在意

義やそれが負うべき責任について問う際の起点となるものである。

人間が現実に生活している生活世界が、科学的探究を含めた人間の活動の基盤であるにも関わらず、価値や世界全体への視点を喪失した科学は、技術と結合すると、やがて人間が生活している環境の維持を危険に晒しかねない負の側面をもつ。その際、科学がその基盤である生活世界への責任を自覚し、また生活世界に内在する常識的判断を真剣に受け止めることが、科学の役割を明らかにし、科学がまたその存在意義を回復するために求められている。

シュトラウスの議論が現代の科学および科学技術が引き起こす諸問題に対して有している有意性は、そうした古代ギリシャ哲学に対するシュトラウスの考察やフッサールの生活世界論がシュトラウスに与えた影響を射程に入れることによって明確になるのである。

## 注

- 1 Leo Strauss, *The Rebirth of Classical Political Rationalism — An Introduction to the Thought of Leo Strauss* — (Chicago, London: The University of Chicago Press, 1989), p. 32, 239. 以下、本書を *RCPR* と略記する。邦訳は、石崎嘉彦監訳『古典的政治的合理主義の再生—レオ・シュトラウス思想入門』(ナカニシヤ出版、1996年) 76、307頁。なお訳文は邦訳から適宜変更している。以下同じ。
- 2 Leo Strauss, *Liberalism Ancient and Modern* (Chicago; London: The University of Chicago Press, 1968), p. 22. 以下本書を *LAM* と略記する。邦訳は、石崎嘉彦他訳『リベラリズム 古代と近代』(ナカニシヤ出版、2006年) 34-35頁。
- 3 *RCPR*, p. 32. 邦訳 76頁。
- 4 Max Weber, „Wissenschaft als Beruf“, in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, herausgegeben von Johannes Winckelmann (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1968), S. 603. 以下本書を *GAW* と略記する。邦訳は、尾高邦雄訳『職業としての学問』(岩波文庫、1936年) 53頁。
- 5 Ebd., S. 604. 邦訳 56頁。
- 6 本稿では、ウェーバーが用いている *Wissenschaft* を学問と訳す。
- 7 Max Weber, „Der Sinn der »Wertfreiheit« der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften“, in *GAW*, S. 508. 邦訳は、木本幸造監訳『社会学・経済学における『価値自由』の意味』(日本評論社、1972年) 61-62頁。  
さらにウェーバーによると、経験科学は、誰にも何を為すべきかを教えることはできず、ただ彼が何を為しえるのか、また何を意欲しているのかを教えるにすぎない。Max Weber, „Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis“, in *GAW*, S. 151. 邦訳は、富永祐治・立野保男訳、折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』』(岩波文庫、1998年) 35頁。
- 8 Vgl. Max Weber, „Der Sinn der »Wertfreiheit« der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften“, in *GAW*, S. 511. 邦訳 68頁参照。
- 9 藤原保信『政理論史』(早稲田大学出版部、1998年)、527頁参照。
- 10 Vgl. Max Weber, „Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis“, in *GAW*, S. 157. 邦訳 48頁参照。

- 11 藤原保信、前掲書、527頁。Vgl. Max Weber, „Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis“, in *GAW*, S. 151-152. 邦訳 34-37頁参照。またアンソニー・ギデンズ著、岩野弘一・岩野春一訳『ウェーバーにおける政治と社会学』（未來社、1988年）、60頁参照。
- 12 J・G・ガネル著、中谷義和訳『アメリカ政治理論の系譜』（ミネルヴァ書房、2001年）、345-349頁参照。
- 13 Leo Strauss, *Natural Right and History* (Chicago, London: The University of Chicago Press, 1953), p. 52. 以下 *NRH* と略記する。邦訳は、塚崎智・石崎嘉彦訳『自然権と歴史』（昭和堂、1988年）62頁。
- 14 Leo Strauss, *What is Political Philosophy and Other Studies* (Chicago, London: The University of Chicago Press, 1988), p. 23. 以下本書を *WIPP* と略記する。邦訳は、石崎嘉彦訳『政治哲学とは何か—レオ・シュトラウスの政治哲学論集—』（昭和堂、1992年）26頁。但し邦訳は全訳ではない。
- 15 藤沢令夫『ギリシア哲学と現代—世界観のありかた—』（岩波新書、1980年）20頁
- 16 同書、55頁。
- 17 同書、56頁。
- 18 ウェーバーは、ある目的を意欲する者を助けて、その意欲した内容の根底にある究極の公理、またその意欲する者が出発点とした究極の価値規準を意識させ、反省させる役割をもつ学問を社会哲学と呼んでいる。しかし、シュトラウスによると、その社会哲学も価値の対立を解決することではできない。

Max Weber, „Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis“, in *GAW*, S. 151. 邦訳 34頁。Cf., Karl Löwith, Tom Bottomore and William Outhwaite (eds.), *Max Weber and Karl Marx* (London, New York: Routledge, 1993), p. 54. ドイツ語の原書からの邦訳は、柴田治三郎・脇圭平・安藤英治訳『ウェーバーとマルクス』（未來社、1966年）、29頁参照。Cf. *NRH*, p. 40. 邦訳 49頁。
- 19 *NRH*, p. 41. 邦訳 50頁。
- 20 *Ibid.*, p. 41. 邦訳 50頁。
- 21 *Ibid.*, pp. 41-42. 邦訳 50頁。
- 22 *Ibid.*, pp. 3-4. 邦訳 6頁。
- 23 *WIPP*, p. 20. 邦訳 22頁。
- 24 *LAM*, pp. 22-23. 邦訳 35頁。
- 25 *Ibid.*, p. 23. 邦訳 35頁。
- 26 20世紀初頭から約70年の間を指す。
- 27 *LAM*, p. 22. 邦訳 34-35頁。
- 28 *RCPR*, pp. 32-33. 邦訳 76頁。
- 29 Cf. *ibid.*, p. 23. 邦訳 66頁。
- 30 *Ibid.*, pp. 22-23. 邦訳 65頁。
- 31 *NRH*, p. 124. 邦訳 137-138頁。
- 32 *Ibid.* 邦訳 138頁。
- 33 *Ibid.*, p. 124. 邦訳 137頁。
- 34 *Ibid.*, pp. 124-125. 邦訳同上。

- 35 *Ibid.*, pp. 123-124. 邦訳同上。
- 36 *Ibid.*, p. 120. 133 頁。
- 37 *Ibid.*, pp. 121-122. 邦訳 135 頁。
- 38 *Ibid.* 邦訳同上。
- 39 藤沢令夫、前掲書、20 頁。
- 40 アリストテレス著、朴一功訳『ニコマコス倫理学』（京都大学出版会、1971 年）、4-7 頁。
- 41 *NRH*, p. 23. 邦訳 23 頁。
- 42 *RCPR*, p. 240. 邦訳 309 頁。
- 43 藤沢令夫、前掲書、12 頁
- 44 同書、12 頁。
- 45 同書、56-57 頁。
- 46 同書、66 頁。
- 47 同書、69 頁。
- 48 *RCPR*, p. 61. 邦訳 108 頁。
- 49 *Ibid.* 邦訳同上。
- 50 *Ibid.* 邦訳同上。
- 51 *Ibid.* 邦訳同上。
- 52 *Ibid.* 邦訳同上。
- 53 *Ibid.*, pp. 57-58. 邦訳 104 頁。
- 54 *Ibid.*, pp. 240-241. 邦訳 309 頁。
- 55 *NRH*, p. 79. 邦訳 89 頁。
- 56 Leo Strauss, *Studies in Platonic Political Philosophy* (Chicago, London: The University of Chicago Press, 1983), p. 31.
- 57 Edmund Husserl, *Die Krisen der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie* (Haag: Martinus Nijhoff, 1954), S. 123. 以下本書 *Phänomenologie* と略記する。邦訳は、細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（中央公論社、1995 年）、218 頁。
- 58 *Ebd.*, S. 49. 邦訳 89 頁。
- 59 *Ebd.*, S. 124. 邦訳 218 頁。
- 60 *Ebd.*, S. 127. 邦訳 225 頁。
- 61 *Ebd.*, S. 128. 邦訳 227 頁。
- 62 *Ebd.*, S. 129-130. 邦訳 227-229 頁。
- 63 *Ebd.*, S. 131. 邦訳 231 頁。
- 64 *WIPP*, p. 23. 邦訳 26 頁。
- 65 *Ibid.*, p. 12. 邦訳 8 頁。
- 66 *Ibid.*, p. 25. 邦訳 29 頁。
- 67 *Ibid.*, p. 25. 邦訳 29 頁。
- 68 *Ibid.*, p. 25. 邦訳 29 頁。
- 69 *Ibid.*, p. 14. 邦訳 11-12 頁。

70 *Phänomenologie*, S. 124. 邦訳 218 頁。

71 Ebd., S. 145. 邦訳 225 頁。

72 Ebd., S. 124. 邦訳 218-219 頁。

\* 本稿は、2008年10月、東京大学生産技術研究所で開催された研究・技術計画学会（第23回学術大会）における報告「レオ・シュトラウスの科学技術論」を基にしている。学会報告の際、ご参加いただいた方より貴重なご意見を賜った。ここに記して謝意を表する。